

## 研究課題：地域と大学の双方向で進める記憶の継承 —明石地域を中心に—

本研究は、コロナ禍において非接触で双方向的な地域研究・連携を追求することを目的として、①ニューズレター等による人的ネットワークの維持と交流、②明石を題材とした記憶の表出（写真展示と演劇企画、公演）、③大蔵谷ヒューマンサイエンスカフェの再開、という三つの活動と学生と共に地域との連携を活性化させる取り組みを行った。以下、その成果を報告する。

- ① については、「明石ハウス通信」を昨年度から継続して刊行した。地域研究センターが主に明石・大蔵地域で実施している研究活動を一般の方々に広報することが目的である。本年度は第2号～第5号（A4版リーフレット、全4頁）を刊行した。あわせてYouTube上に「明石ハウスチャンネル」を開設し、過去の公開講座や新たに作成した「くずし字解説講座」の動画を昨年度から継続して公開している。
- ② については、中山ゼミ2回生などが明石を題材とした「リーディング公演」を有瀬キャンパス内のオーバルホールにて実施した。公演された演目は『愚かさの末』『明石焼に俺はなる』『アタシノアカシ』で、いずれも明石を題材に学生が自作自演で行った。また、「明石を題材とした記憶の表出」として、2022年7月より明石ハウスにて写真展を実施した。終戦から間もない頃の稲爪神社における秋の大祭の写真を展示し、地域の方々に見ていただくと同時に、写真から喚起される記憶について、聞き取りをした。双方向のやりとりができた事例であった。
- ③ については、コロナの影響で開催を断念していた「大蔵谷ヒューマンサイエンスカフェ」の再開企画として、シンポジウム「海のまほろば—明石で始める風土と暮らしの人文学—」を開催した。密になるリスクを考慮して明石ハウスではなくアスピア明石で行ったが、参加者からからは「駅から近くて参加しやすい」という意見をいただいた。内容は、前半は人文学部教員が基調講演（中村「明石の魚と百人一首—藤江でマグロが釣れた?!—」、用田「旧明石郡の前方後円墳の保存と活用—三者三様の五色塚古墳・白水瓢塚古墳・玉塚古墳—」）を行い、それを元に参加者との質疑につなげた。後半は「人の暮らしと人文学—明石から「人間」を考える—」をテーマにシンポジウムを行い、古代や現代の社会における海と人との関わり、漁民の暮らし、明石における海の位置づけや淡路島との関係などを議論した。
- ④ その他の学生と共に地域との連携を活性化させる取り組みとして、(1)大蔵地区における都市近郊班の研究、(2)稲爪神社発信の地域連携活動を実施した。

(1) については、大都市郊外地域における価値の再発見と持続のためのアクティブラーニング研究として、明石市大蔵地域で矢嶋ゼミの3回生が夏研究調査（於稲爪神社）を行った。同地域で生まれ暮らしてきた女性4名に、遊び、余暇、買い物の場所と変化などの聞き取りを行い、高度経済成長期から現代まで暮らしの変化に位置付ける（現在、報告書を作成中）。

(2) については、稲爪神社より顔出しパネル製作の依頼があり、美術部鷗風會の学生が作成、奉納した。これは、神社発信の活動にセンターが応答し、双方向の交流となった一例である。有瀬キャンパスは稲爪神社の氏子域に含まれ、宮司さんは、大学を地域の一部と考えてくださっていることも確認できた。

以上、コロナ禍においても非接触的な方法により地域研究・地域連携がある程度可能であることを確認した昨年度に続き、様々な非接触型の活動を続けていくことで、双方向交流の次の展開に向けて取り組めたことが、本研究の成果である。それぞれの活動において、地域の方々との対話やアンケートなどを通じた双方向交流の仕掛けを工夫した。しかし、コロナ禍でシンポジウムの参加者自体が少なかったことや、紙面上では活発な双方向交流に至らなかったなどの課題が残った。また、学生が参加する地域連携・研究活動が乏しかった点も反省点である。

一方で、稲爪神社発信の地域連携活動が進むなどの進展もあり、地域の声を受け止めることが今後の地域連携・研究活動の萌芽となりうる。学生が地域の方と交流する具体的な活動を実施することで、多様な双方向交流が進む契機となるのではないだろうか。